
デジタルパンク通信 第十九話

Q 来年でしょうか。十年でしょうか？

A 十年です。

今年はブロードバンドの年。来年は次世代ケータイと無線LAN。その次はデジタルテレビかな。みんなカネがないと言うわりにデジタルは景気のいいことで。しかし問題は、その次の年も、その次も、そんな年になるってことだ。あと十年くらいは、いつも何かしら新しいデジタルの年になるってことだ。

そのたびに、コンテンツはどーするって話になる。そしていつも音楽が矢面に立たされる。デジタルと相性がいいからね。そしてそのつど業界では、ある人はこれをチャンスととらえて陽気になり、ある人はピンチととらえて顔をしかめる。ある人は積極的にコンテンツを提供し、ある人はダメだと言って手控える。問題は、どっちも正しいってことだ。

だからオタオタする。便利になるんだから、オーディエンスにとってはいつもチャンスだが、業界には緊張が走る。新しい技術で、うまく表現できるだろうか。もうかるだろうか。あいつにもうけが取られないだろうか。あいつの方がうまくもうけるんじゃないだろうか。新しい技術は音楽とそのビジネスを幸福にするのだろうか。問題は、答えがないってことだ。

だから答えを見つけようと努力する。アーティストもプロダクションも、レコード業界も著作権管理団体も、バラバラじゃダメだってんで、あれこれ話し合う。互いの取り分に気を使う。協力してみたりケンカしてみたりする。だが問題は、デジタルの大波で、テレビや映画やゲームやブロードバンドやケータイのうねりの中で、音楽が埋没していつてしまうことだ。音楽の業界の中より、外の展開が速いってことだ。

コンテンツがうまく流通したり利用されたりするためのビジネスモデルや技術はどんな具合だろう。デジタルは音を聴く人や音を創る人をどう変えるんだろう。そのようなことは、業界だけじゃなくて、通信・放送会社とかメーカーとか、あるいは行政も関わってくるテーマだ。問題は、テーマがあまりに本質的で幅広いってことだ。

というわけで、この秋のイベントin the city japanで、音楽業界と中央官庁によるセッションを開いてみた。官庁もひとつじゃ太刀打ちできなくて、文化行政、産業行政、ネットワーク行政にまたがるので、文化庁、経済産業省、総務省、そして内閣官房の責任者に来てもらった。そういう方々が一堂に会するのは初めてだったようだ。問題は、これまでそんな場がなかったってことだ。

新しい技術やサービスの事情が流通する場が必要だ。そこに行けば、携帯電話があつたり実験があつたりケンカしてたり、なんとなくみんなの様子がわかつたりするようなコミュニティ。仲良くケンカするトムとジェリーの住む家のような。実に骨の折れる仕事だが、関係者たちによる緩いコンソーシアムができればいいと思う。より大きな問題は、その場はこれからかなり長いあいだ必要になるということだ。
